

学位論文審査の要旨

学位申請者	川崎 弘美 生活工学共同専攻 2016年度生		論文題目	19-20世紀転換期ウィーンにおけるコロマン・モーザーの空間デザイン—ヨーゼフ・ホフマンとの比較—
審査委員	主 査:	長澤 夏子 准教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	元岡 展久 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	藤田 盟児 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	太田 裕治 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	小崎 美希 助教		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (学術)	(Ph. D. in History of Architecture)		<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、19-20世紀転換期ウィーンにおけるコロマン・モーザーの空間デザインの特徴とそのデザイン史における意義を検討したものである。G・クリムト、O・ワグナー、J・ホフマンなど数多くの芸術家が活躍した当時ウィーンは、建築、絵画、インテリア、グラフィック分野で、伝統的デザインからモダンデザインに展開する大変動期であり、デザイン史上の重要な位置づけを有している。コロマン・モーザーもこれらの高名な芸術家の一人として知られるが、その評価はグラフィックデザインの点からのものが多く、空間デザインに注目した分析、評価は少ない。そこで本研究は、モーザーの空間デザインを近代の無装飾な空間の先駆であることを示す。また、モーザーと同時期に活躍し協働した建築家であるJ・ホフマンによる空間デザインとの比較を通じて、モーザーの空間デザインの特徴を明らかにし、その歴史的評価を示すことを目的としている。

まず、本論ではモーザーの空間デザインの簡素性を示すため、独自の評価方法を提示した。その簡素性の評価に基づき、ビルディングタイプ別の比較、モーザーとホフマンとの比較を行った。これまでモーザーについては展示空間で簡素な空間が指摘されてきた。本論では、簡素性は同時期に住宅の空間デザインにも表れていたこと、また、ホフマンに比べモーザーは簡素な空間の創出に先行していたことを示した。

つぎに、住宅の空間デザインにおいて用いられた装飾や家具について、モーザーとホフマンを比較分析した。文様についてはホフマンが幾何学的、モーザーが有機的なものを多用したため、既往研究ではホフマンが近代デザインの先駆として注目をあつめてきた。一方、本研究の分析からは、ホフマンが幾何学的、モーザーが有機的であるが、両者は協働を経て互いに影響をあたえていたことを示した。また空間全体としては、モーザーのほうがホフマンより簡素であったことを指摘するとともに、空間デザインの簡素性についてはモーザーが先行し、モーザーがホフマンに影響をあたえたと解釈した。

これらの分析を踏まえ、またこの時期の空間デザインの背景を鑑みながら、「装飾の簡素性」と「空間の簡素性」の点で、モーザーとホフマンの異なる空間デザイン手法を明らかにした。19-20世紀転換期ウィーンの空間デザインにおいて、モーザーの先駆性を高く評価し、結論としている。研究過程において、筆者はウィーンの図書館、美術館で、資料調査を実施し、加えて、実際に残っている作品のいくつかには、現地調査を行なっている。多数の資料をもとに、分析の幅を広げた。本研究は、新しいモーザー評価の視点を与えるとともに、新規性のある評価方法を提案するなど、研究成果が高く評価できる。

以上の結果から、本論文は人間文化創成科学研究科の博士(学術)(Ph. D. in History of Architecture)に相応しいものであると判定した。